

詩心象

詩・安水
画・石阪
稔和
春生



いけだまちあゆみ

西国街道沿いの旧池田村から生まれた町のひとつに私は住んでいる。雨が降ると曲りくねった坂道を雨水がどっと流れ下る。雨があがるとすぐ乾く。子どもたちが駆けおりてくる。

道端の石垣を蟬が登っている。石垣のうえに樹が一本夢のように立っている。樹の下枝に蟬の抜け殻が鈴なり。風がきて花のように揺れている。どこか遠くから降ってくる蟬時雨。

●れんさいエッセイ Wakakoの神戸はK O B E 〈3〉

所変れば料理かわる

小原稚子

小原流理事・国際部長

絵／上尾忠生

“おいしいものを食べる”ことというのは、私が最も情熱を傾けることのひとつである。この楽しみとお酒がなかったら、人生の悦びは半減すると断言できる。食べることに関心のないひと、または食欲のないひとというのは生きることへの意欲のないひとのように思えてならない。事実、この方程式はほとんどの場合にあってはまるというのが経験からの結論である。

食べることに興味をもっているひとには、料理することも好きなひとが多い。私などもおいしいものに出会えると、すぐ挑戦したくなる。食べてみると、ほぼ調理法が解るものだ。調理人にその作り方をたずねないで、試作品が“オリジナル”に近い味にできたときの嬉しさはまた格別である。

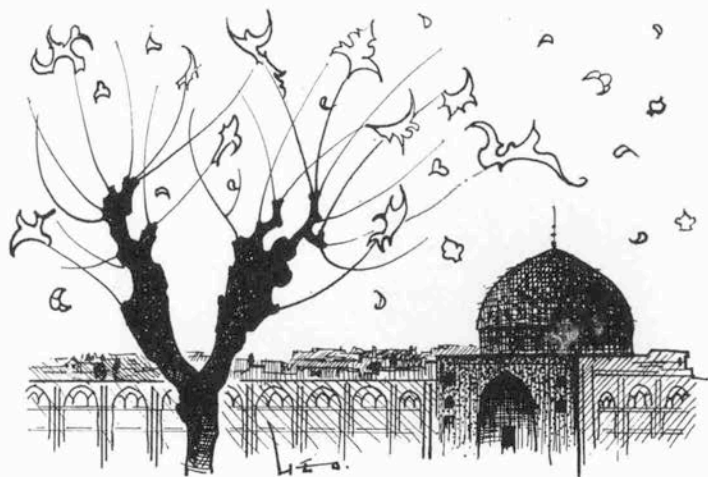
国内ばかりでなく、外国にいくとおいしいもの、珍しいものにめぐり会えるのが楽しみだ。同行者が二口と食べられないと音をあげるような料理でも、私は平気で食べてしまうことが多い。どんなに見かけが悪くとも、とにかく試食してみる。「食べず嫌い」ほど調理してくれた人にとって失礼なことではない。

イランのイスファハンという街を訪ねたときである。まだ平和な時代だった。テヘランでの仕事をすませ、父と助手と私で一日どこかへ出かけよ

うということになった。テヘランから飛行機で一時間ほどのこの街は、日本でいえば京都のような感じの古都である。イスラム教のモスクの数々が、そのモザイクの美しさを競い合うかのように林立していた。

ホテルに着いたのは、もう昼をだいぶ過ぎてからだった。とにかく昼食をとろうと二階のダイニングルームへ向った。中庭を見下す小さなダイニングに人影はなかった。「こんな時間だから食事代りになるようなものがあれば……」と言う私に、ウェイターはニコリうなずいて下った。

注文をすませてようやく落ちついた私たちは、くつろいでまわりを見渡した。このシャアバスホテルは昔の宿場の面影をそのまま生かし、中の設備だけを近代的に変えた贅沢なホテルであった。私たちは二階の回廊風のテラスから中庭を見下ろしていた。テールごとに日射しよけの大きなパラソルがかかっていた。心地よいそよ風が吹き抜ける。ひっそりとしたダイニングルームには、時折マナーのよいウェイターたちが歩くひそやかな足音が聞こえるばかりである。仕事から解放され、誰ひとり知るひのない異国のホテルの昼下り——。何という心地よさであろうか。心が次第に伸びやかに広がっていき、そのまま眠りに誘われそ



うなげだるい気分だった。まるで時が歩みを止めたような静けさである。目をつむると、かすかに街のざわめきやコーランを唱える声が遠い波のように響いてくる。

古いイスラムの文化遺産と近代的な設備とがたぐみに融合した不思議な魅力をもっていたのは、そのホテルの建物だけではなかった。その午後、私たちが食べたものも、ずいぶん奇妙に魅力的なものであった。しばらくするうちに料理が運ばれた。テーブルの上には、フランス料理らしく豪華なデコレーションプレートが銘々の前に置かれていた。その上に、白い皿に盛られた料理が置かれ

たのである。もちろん、ナイフやスプーンやフォークがセットされている。

料理は、マカロニにホワイトソース——つまりフランス料理とかイタリア料理というたぐいのものであるが、しかし断じてグラタンではないのだ。ホワイトソースをかけたマカロニが少しずつ取り分けられて焼いてある。よく見ると、オーブンで焼いたのではなく、ちょうどお好み焼風にフライ返しでベタッと焼いた……という感じである。白いソースに焦げ目がついて、そこにグリーンのパセリのみじん切りが散らしてある。

私たちは、糊のきいたテーブルクロスの上に出されたその得体の知れない“お好み焼風マカロニ”を食べた。“なに料理”なのか私たちには見当がつかなかった。味は？ もちろんおいしかった。食べているうちに、その料理は、昼下りのシャープアバホテルで食べるために作られたもののような気がしてきたくらいである。時間外だから、グラタンの材料の残りで適当に作ったのだろうか。それとも、何かイランの料理に似せて焼いたのだろうか。私には今もってその答えが解らない。

もう十数年前に食べたその料理の味は、今でも私の舌に残っていて、いつでも再現できそうな気がする。けれども、まだ挑戦したことがない。それは、“幻の料理”として、私の思い出のなかにそっとしまっておきたい料理だからに違いない。今、イスファハンはどうなっているだろうか。もう一度シャープアバホテルに泊って、あの不思議な料理を食べてみたい。しかし、そのときに、ひっそりと静かで、そよ風と陽の光が心地よい、優雅でけだるいひとときをもう一度経験できるかどうかは解らない。

□巻頭対談□ノザワハウス イン コーベ・セミナー

神戸居留地文化は「海のシルクロード」

陳舜臣 作家 VS 坂本勝比古 建築史家
千葉大学教授

大正二年（一九一三年）九月に創立の株式会社ノザワは、今年で創立七十周年を迎えることになる。この創立七十周年を記念して「ノザワハウス イン コーベ・セミナー」が企画された。ノザワは居留地時代から唯一残された建物を所有、本社として活用している。セミナーは同社のこの特徴を生かし、地域と建築の文化振興に貢献したいとの考えから実行された。同社によると、セミナーは神戸他各地で年三回ぐらいを予定しているとのこと

とだが、その第一回が六月四日、神戸市立博物館で催された。講師には作家の陳舜臣氏、工学博士で千葉大学教授の坂本勝比古氏が招かれ、「世界の居留地文化」をテーマに対談形式で行われた。

★神戸に居留地ができた背景

陳 現在朝日新聞の夕刊に「録外録」を書いておりませんが、民族と民族との関わり合い、習慣の違い民族同士がどう関わったかをテーマとしております。これも六月に終わりますが、最後の仕上げとして「租界」をとりあげるつもりです。本日は取材のつもりでまいりました（笑）。坂本 居留地というのは、人類の長い歴史の中でそれぞれの地域に生まれ、興亡を続けてきたと思うわけですねと申しますのは、数年前イタリアに留学したことがあるんですが、シチリア島を訪れたとき、ギリシア時代のコロニー、いわゆる植民地を見ました。このように、植民地、つまり居留地は古い歴史を持っているのです。

私の受持ちは建築ですが、日本の居留地の時代背景はどうだったかなど、文化的側面からも考えていきたいと思っています。

陳 中国では租界と呼びますが、日本では居留地と呼びます。租界にしる、居留地にしる、コンセンションとセツ



「スポーツ、経済、文化など居留地から得たものは大きい」と陳氏



「民族の主権尊重は当然だが、歴史の必然も直視しなければ」と坂本氏

ルメントがあります。コンセションというのは政府が一括して各国の領事団に分譲する。セツルメントは土地の所有者、地主が外国と契約する、しかし契約と同時に政府公認の租界地域になります。始まりは一八五四年、阿片戦争の後です。

居留地というのは外国人が入ってきたらかなわんということで、政府が自発的に設けたものです。いい例が長崎の出島です。幕府が外国人をそこに閉じ込めるかたちだった。つまり日本側、地主側の都合でした。ところが十九世紀になると入国する側の都合に性格が代わってきます。治外法権がいい例です。事件が起こっても裁判は居留地国だけするというようなことですね。

坂本 日本に居留地ができた背景は、十九世紀のヨーロッパ及びアメリカが産業革命以降の製品の市場販路を求めたことにあります。ヨーロッパはアフリカを迂回してインド、シンガポール、インドシナ、中国を経由して、日本に寄ってきたわけです。またアメリカは、十九世紀中頃の太平洋洋に通ずる横断鉄道の開通に伴い、太平洋に進出することにより、捕鯨、中国貿易と拡大していきます。その中で、地理的に日本が浮かび上がり、開港を求めてくることになるわけです。

アメリカのハリスが日米和親条約（一八五四―安政元年）で望んだことは、開国や貿易のほかに、捕鯨船の食糧補給などであったわけで、日本侵略の意図はなかったのです。安政五年に日米修好通商条約が結ばれますが、その三条に居留地の条文がありまして「日本政府はアメリカ人に居留を許すべし、そして居留の者は一個の土地を値を出して借り、またそこに建物があればこれを買うこと妨げなし、かつ住宅、倉庫を建てることをも許すべし」となっています。

陳 その安政五年（一八五八年）に、横浜、長崎、函館が開港するわけですね。神戸は九年遅れの慶応三年（一八六八年）の開港です。その理由は、京都の孝明天皇を始めとする公家さんたちの毛唐嫌いにあったんです。ところがこれが幸いしたんですね。横浜などの失敗例をたくさん見てきているから、神戸には模範的な居留地ができあがってくるのです。

私は神戸が最後の居留地、租界だと思っています。翌年東京の築地に居留地ができたが、非常に小さい土地でしたので実質的な影響はなかった。神戸が受けた影響の比ではなかったと思います。

神戸の居留地の解消は明治三十二年（一八九八年）です。しかし近代文化の中心は長くこの居留地にあった。明治の近代化、西欧化の中心が神戸の居留地にあった。横浜の場合、東京に近いですから政治的な要素もあったんですが、神戸の場合その要素がなかった。だから人々が安心して文化文明をとり入れたんですね。政治がらみですと何かあるんじゃないかと警戒しますからね。神戸のよかった点といえます。

坂本 居留地の外人は最初は日本人と一緒に住みたかったようですね。共同の生活をしたと主張するのですが幕府は異国人が同居することは好まず、また刃傷沙汰が起きることを懸念して、独立した地域を設定してしまう。長崎は大浦居留地、横浜は神奈川のはずが横浜になったという経緯がありますね。

陳 最初、神戸に居留地をつくったとき外人は不満だったようです。そのことは当時のジャパニタイムスに書いてあります。昔から大阪の堺は有名だったし、伝統もあるのというわけですね。ところが先見の明があったといいますが、大型の船の出入りなんかをみても堺より神戸の方が条件がよかったですね。ですから明治三十二年居留地を返還するときに、代表のフランス領事が、誇りをもってお返ししますと挨拶しております。

★日本の居留地と中国の租界の相違点

坂本 日本と中国の相違点を述べますと、租界における外国人の自治が中国では完全に行われていたのに対し、日本は十分に行われなかった。長崎は明治九年、横浜は十年に居留地の自治を日本に返上してしまふんです。これは外国人達が自分たちの権利を主張することが強く、共同体制をとって、日本と交渉することができにくかった。また自治を運営するには維持費がいるわけですが、それを十分賄えなかった。そういうわけで自治権を返上してしまふんです。ただ神戸の場合は違っており、自治組織が明治三十二年の条約改正時まで続いた。これは神戸の居留地をりっぱな町にするのに有効だったといえます。しかし別な見方をすれば、外国人の自治が強く、神戸の主権が及び得なかったとも言えます。ともかく、返還時にはきれいな街を神戸市に返したわけですが……

もう一つ中国との相違点は、居留地では居留地会というものをつくりますが、同会では各国の領事の他に、居留民の代表が三人と、日本代表として知事が参画する制度があったのです。ところが中国の場合、外国人だけが租界の管理をしていたのです。ですから日本は外国人に完全に支配されていなかったといえます。

陳 中国と日本のもう一つの違いは雑居なんですね。神戸の場合は居留地が仕事場であって、住まいは雑居ということですが、上海の場合はスケールが大きくって、租界すべてが雑居なんです。神戸の居留地は四万坪ですが

上海は六百万坪。比べものにならない位広いわけです。そこでどういう状況が現われるかというと、上海には市参事会という租界の自治体がありまして、これに中国人が治められる形になるんです。すると清末の動乱の時代ですから、安全を求めてそこに中国人が亡命するといった事態も起こります。そうなるとその民族意識も生まれてきます。さきほど坂本先生が外国人の自治に日本の場合、知事が参画していたといわれましたが、上海も段階的に中国人が参画しているんですね。ただ自治統括の意味が広義と狭義にわかれるわけです。神戸四万坪、上海六百万坪を同レベルで測れない難点があるもんで解釈の相違がやや出ますが……。上海の場合も当初こそ九人の市参事が、九人とも外国人でしたが、一九二八年に中国人の参事を三人いれて九対三、一九三〇年には九対五の割合になったんですね。このことは、中国人の数の多さもさることながら、ナショナリズムに妥協せざるを得なかったという点もあるんです。

★居留地から学んだもの

坂本 日本の居留地の面積比較をしますと、一番大きなのが横浜の三二万六千坪、長崎が一〇万五千坪、神戸が四万坪、東京が二万九千坪、大阪が一万坪、函館五千坪となります。

神戸の居留地は、海岸線から昔の市電が通っていた花時計と大丸を結ぶ線の範囲でして、面積的にもこじんまりとまとまり、居住者の協調もよかったですね。よく居留地には日本人は入れなかったと書かれたりしますが、実際は自由に出入りしていたようです。むしろ出入りしないと彼らの生活も成り立たないわけです。

陳 荷物運びの労働者なんかが入っていましたよね。居留地内の一号館、二号館というのも労働者の便のために作った名称ですからね。

私が思うに神戸がよくまとまっていた原因にスポーツがあるんじゃないかと思うんですね。外国人はレクリエ

ーシヨングラウンドと呼んでいたんですが、内外人共有公園と正式に呼ぶ施設があったんです。ですから、ここには日本人も申請すれば入れたわけで、ここで日本人がとりいれたスポーツがたくさんあると思うんです。水泳のクロール泳法、ラグビー、野球など…。これが日本人との交流に大いに役立っていますね。

それから神戸には洋家具屋さんが多いんですが、船大工さんの出身が多いんですよ。外人さんは洋家具が欲しいが大工さんまで連れてきていない。そこで木造船が駄目になった日本の船大工さんと呼んで、洋家具をつくらせた。それが洋家具の発祥なんです。そうやって学んだわけなんです。そういった例がたくさんあるんです。



将来、神戸文化の拠点として位置づけられる神戸市立博物館で、対談する両氏。

よね。

坂本 洋服のテーラー、靴屋さん、ペンキ屋さん、散髪屋さんなど、多くのことを学んだと思います。神戸が大阪や京都と違うイメージをもつことの役に立っただと思えますね。

陳 明治の初年あたりには中国から来る人が多かったんですよ。

坂本 そうですね。上海、香港、広東…。

陳 当時は日本では洋服は作れなかった。そこでテーラーがくる。そのテーラーは大体、寧波の人ですよ。現在でも中国人のテーラーは寧波の出身ですね。散髪屋は揚州の人です。散髪技術がどうかじゃなくて、来た人がたまたま揚州の人だった。その後、徒弟を故郷から呼んでくる。そういう具合ですね。

★キリスト教文化と西洋建築が根づく

坂本 文化的特色の一つにキリスト教があります。日本政府は明治八年、キリスト教の禁制を撤廃しました。宣教師が居留地外に居住できるようになり、ミッシヨンスクールもたくさんでき、それが神戸の文化に大いに貢献したと思われます。キリスト教を通じて西洋の文化、文明をかなり受けたと思います。

陳 関西学院大学、神戸女学院、松蔭女子学院とかですね。賀川豊彦さんの運動、河上丈太郎さんの系譜も綿々と続いていますね。キリスト教が神戸に精神的な面で寄与したものは非常に大きいといえます。

しかしラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は神戸の外人に関して悪口ばかり書いていますね。彼は記者をしておりまして、居留地は商売人ばかりで野卑な空気が支配していて辛抱できない、と書いていますね。彼ほど神戸の悪口を言った人はいないですね。

坂本 居留地の建物についてもハーンはあまりよく言っていないかと思うんですが、否定的な意見を述べた外国人たちは、日本の伝統的な文化に憧れがあったためだ

と思われますね。ハーンの場合、日本の文学、文化に憧れていたのですから、神戸に着いたとたんバタクさい建物が並んでいれば、彼のイメージにそぐわなかっただろうと推察されますね。その辺はそれぞれの価値観になっ
てしまうでしょうね。

次に建築家に目を向けますと、神戸の居留地を設計した人は誰だったかということなのですが、かねてから注目していた一人に、イギリスのJ・W・ハートという人がいます。経歴が不明だったんですが、最近東京の下水道協会の調べでわかったんです。ハートが明治の神戸の下水道を手がけているんですが、これが下水道史の記録に残るようなりっぱなものなんです。そこでイギリスに問い合わせると、彼はリバプールの出身で、著名な建築家に師事し、ペルーなどで活躍、上海を経て、一八六八年明治の政府に招かれて日本に来ています。

また一八八一年、明治二十一年に来日したハンセルという建築家がありますが、ハンセルを調べてみますと、ロンドンのRIDA、これは建築家協会のようなものですが、この協会の資格をもっているんですね。そして彼を認定した人にバックingham宮殿の設計者の名前が見えるんです。つまりそれだけの實力を持った人が、神戸を訪ずれているということです。

マーシャルやベレーケの名前はよく聞きますが、ハートやハンセルといった人達も含め、ハイグレードな人達が神戸に来ていたということですね。

陳 材料の面ですが、当時は材料が豊富ではなかったでしょうね。まさか故郷から持ってくるわけにもいかなかったでしょうし……。こちらで色々工夫したんでしょうね。

坂本 そうですね。中国の洋館の場合は石とかレンガの造りが多いです。日本の洋館に木造が多いのは、日本が木の産地であったからです。

屋根に関して述べますと、トーマス邸の屋根には石面スレートが使われています。同様に王子公園の東にあるハンター邸、相楽園の廐舎の屋根も石面スレートが使わ

れています。このスレートなんです、ノザワさんの初代にあたる野澤幸三郎さんが明治三十八年にお店をもたれ、その時から輸入を始められたそうです。スレートとはいわゆるセメントのことです。一般には気がつかないところですが、こういったもので神戸の建築が日本の建築の近代化に果たした役割りは少なくないと思います。技術的にも材料の上からも、また意匠の上からも……。

★居留地文化のシンボル「ノザワ」

坂本 「春の海」を作曲した箏曲の宮城道雄さんという方がいらつしやいますね。彼は日本の音階と西洋の音階とをミックスして、独特のメロディーを生み出されましたが、彼は実は居留地の生まれなんです。その彼が居留地を書いた美しい文章があるんです。ちよつと読んでみます。

「私もずつと幼いころは三宮の近くの居留地に住んでいた。浜辺にある芝生の上のベンチでよく遊んだ。夕方など、夫婦連れで散歩している西洋人の靴の音や、ステッキの音や、また美しい夫人の声が涼しく聞こえてきた。ピアノの音とかオルガンの音を聞きながら、彼の音楽的才能は日本と西洋の接点のなかで、培われていったんじゃないかという気がするんです。」

陳 音楽といえば、ロシアの音楽家が革命後、神戸に亡命しましたね。これは居留地時代以後のことですが……。神戸はただ商売の街ではなく、芸術の街であることもアピールしていかなければなりません。

坂本 神戸というのは港町文化ということで、底が浅いとみられがちですね。京都や奈良に近いもんですから、どうしてもコンプレックスがあるように思えます。ですから卑下するような見方があったわけですが、陳先生はどのようにお考えになりますか？

陳 京都でも奈良でもそうでしょうが、余り伝統の力が強過ぎて身動きのとれないところがあるんじゃないでしょうか。神戸はその点割合フリーでありまして、新しい



市内に残る唯一の、明治初期神戸の居留地洋館。現在はノザワ本社。

ものがくればそれにとびつくといいますが、向かっていても別に非難する人が近所にいない。そういういい雰囲気といえますか、まあ別の面で見れば薄っぺらいと言われるかも知れませんが。しかし日本国中がみな同じ性格であってはつまらないので、土地柄のバラエティがあつていいんじゃないでしょうか。これからは広域時代になつていきますから、それぞれの特徴を喪失していくのではなく、自分たちの特徴に気づき、それを伸ばしていくようにするのが大事だと思いますね。

坂本 神戸の街にしろ、洋館にしろ、神戸だけで考えるのではなく、アメリカ、ヨーロッパ、中国、東南アジアなどを含めたグローバルな視点から見ていく必要があると思います。

陳先生はシルクロードで色々と御活躍中ですが(笑)、神戸の居留地は人々の交流、つながりなどからみて「海のシルクロード」といった意味合いをもつ気がします。

我々はどんな小さな国であっても民族の主権は尊重しなければならぬが、歴史の中で生まれてきた必然性を直視し、どう現代や未来に生かしていくかが非常に大きな問題だと思います。ノザワさんの商館は居留地に数百年あった建物の中で、奇跡的に唯一残った建物なわけです。ノザワさんは、これを文化のシンボルの一つとして何とか守っていくつもりだと伺ったんですが、この博物館とともに、将来に示唆を与える記念すべき場所になつていくと思います。

(神戸市立博物館にて)

△文責・編集部▽

Juchheim's
Die große und kleine Feinschmecker
 Jede Präschrift am Meist
 Seit 1981

HEALTH
 IS
 ELEGANCE

ブルガリア菌が生きている。
 ヘルシーなヨーグルトデザート。

パッションフルーツ・ハイデルベア・ヒンベアの3種類。

ユーハイム本店で、
 つめたく冷やしてお待ちしています。



ユーハイム

本店

神戸市中央区下山手通2-1-18

TEL (078) 331-1694

営業時間：10:30AM～8:00PM

こんにちは赤ちゃん



一橋奈々ちゃん／芦屋市津知町

完全看護★冷暖房完備★病院前駐車可能

芦屋 柿沼産婦人科



芦屋市大栴町1番18号

芦屋保健所東隣

☎ 芦屋 (0797) 31-1234 代表

一営林署長が開発した高度な林業技術 幻の山崎式林業

松島 昇 △東京大学農業経営学科学科研究生▽

ほぼ十年前まで、実栗郡の国有林を管轄する山崎営林署の最も重要な生産材は天然杉であった。しかし、この山崎式杉が極端に減少してしまった今日となつては、もはやその存在自体が幻に近い。

ところで、加工技術は育たなかったが昭和初期にはこの天然杉を対象に極めて高水準の森林を育てる技術が当地に開花している。「山崎式林業」とも呼ぶべきその技術は、当時の林業行政の中枢（農林省山林局、現在の林野庁に当る）からも注目を集めていた。しかもこの技術体系は大正十五年即ち昭和元年、山崎営林署に赴任した一署長の個人的な奮闘努力によつたものである。

ただし、この署長も山崎に来るまではその天然杉について一片の予備知識もなかった。彼は着任早々四千畝に及ぶ天然杉林を眼のあ

たりにして、「京阪近き播州に斯る大森林ありとは」と感激している。その感激ぶりは彼が冬の最中に雪に閉ざされた赤西・音水地区の杉林を単身スキーで観察に回ったことからうかがえる。

調査がさらに進むにつれ、この天然杉林はその幹の太さが、太いものから細いものまで大変多様であることが分つてきた。すると皆伐方式によるそれまで営林署が行つてきた天然杉の収穫ははなはだ不合理となる。なぜなら木材の値段は基本的に太さが大きく左右する。太い材は高く、細い材は極端に安い。山崎杉の場合本数で八割以上が細めの木である。つまり少数の大径木を得るために膨大な数の細めの杉までほとんど無駄に伐られていたこととなる。当時の、そして今日でも一般的に行われている成立木を総て伐るこの皆伐方式をもつてすると山崎杉は大変扱いにくい森林である。

しかし、もし大径木だけをうまく収穫することができれば、その周囲にある中径、小径木は光と空間を得るためさらに成長が期待できる。その上伐採跡地には自然に天然杉の種子が芽を出し、次代の若い杉が育つことも可能となる。間

題は大木の抜伐りが皆伐より能率が落ち、しかもその搬出の際に残存木を傷だらけにしてしまう恐れである。この点に配慮したかの署長は収穫木を自ら選定し、実際の作業では傷害木を数%に抑えることに成功した。このため視察に来た本局や試験場の幹部連からこの大木の抜伐り事業は「お手柄」とほめられるほどの成果をあげている。

さらに、伐採跡地に生えてくる杉の若木が少ない場合には当然苗木の植栽が必要となる。これに対しても山崎杉の発根しやすい特性から挿木を主とする育苗法が彼によつて開発された。このように「山崎式林業」は着実に組立てられていった。この署長の堅実な仕事ぶりの一端は、冬は穴ごもりを決めこんでいた営林署職員達にスキーを教えることによつて雪中の作業が意外に楽なことを知らせた点にも示されている。

惜しいことに「山崎式林業」は戦時期を迎えて霧散してしまう。天然杉が戦時には軍事物資となり、戦後には復興資材として濫伐されたためである。その後彼の署長が試みた非皆伐方式は山崎営林署においても復活することはなかった。

なお、実栗郡で半世紀余り以前に営まれたこの非皆伐方式に対して全国的に関心が高まってきたのはようやく最近のことである。

（文中の署長とは中山発郎氏を指す）



昭和38年大阪の原木市場「関西木材市場」に全国の国有木材を代表する銘木として出品された大阪営林局管内、山崎営林署のみことな天然杉丸太。

井植文化賞

戦後、日本の復興と繁栄に大きな足跡を残した三洋電機株式会社の創設者、故井植蔵男氏の遺志によって昭和44年11月に設立された財団法人「井植記念会」が、兵庫県在住または兵庫県にゆかりの深い人のなかから、めざましい活躍をされた人を受賞の対象としてその功績を讃えるとともに、地域社会のより一層の発展に寄与したいと考え、この《井植文化賞》5部門を設定しました。今回で第7回を数え、各分野の評論家、学識経験者などをもって部門ごとに構成される選考委員会によって次のように決定しました。

報道出版部門



淡路祭事記

神戸新聞淡路総局

代表・小西 光

昭和57年4月1日より翌58年3月31日までの1年間を通じて、神戸新聞淡路版に連載された「淡路祭事記」は、365日の毎日、淡路各地で行なわれる祭りを克明に追った貴重な記録である。淡路全地域のすみずみまで徹底調査し地域文化を掘り起こした業績と企画の独自性を高く評価された。

取材班／小西光、清水兼男、織戸新、沖永朝裕、竹内信六、松本悟、繁田勝。

地域活動部門



明延ふるさとづくりの会

代表・田村新一郎

かつて鉱山の村として栄え、鉱業の盛衰による人口変動の激しい明延地区は、昭和54年8月に住民のふるさとへの愛着心を深めるため、360世帯全員により「ふるさとづくりの会」を発足。

昭和55年4月には共同墓地の整備、夏には慰霊碑の建立、また河川の清掃・環境衛生活動などもすべて住民の手によって行なわれてきた。現在ではボランティアとしてマイカーバンクも進められている。

社会福祉部門



米田寛子

＜兵庫県難病団体
連絡協議会事務局長＞

現在、高校3年生の二男が小学1年の時、発病（ネフローゼ）し、1年間の休学を余儀なくされた。その時、難病対策の遅れを痛感し「腎炎・ネフローゼ児を守る会」に入会。51年より同会会長に。55年6月より「兵庫県難病団体連絡協議会」の事務局長に就任。難病患者とその家族を対象に医療・生活・教育相談会を年2回県下で開催、対行政交渉等、10団体3千8百人を抱える同会の要である。

科学技術部門



辻 荘一

＜神戸大学農学部助教授＞

昭和17年高知県生まれ。兵庫農科大学畜産科卒業、同大学助手を経て、神戸大学農学部助手。同53年には京都大学で農学博士、同54年から神戸大学助教授（家畜育種学）となり現在に至る。その間、文部省内地研究員として、徳島大学医学部酵素研究施設で、勝沼信彦教授の指導を受ける。同57年には受賞対象の研究を国際アイソザイム会議で発表。また神戸市農業祭の肉牛部門審査委員。

文化芸術部門



昇 外義

＜画家＞

大正14年富山県高岡市生まれ。富山県立高岡工芸学校（現高岡工芸高校）図案科、京都絵画専門学校（現京都市立芸術大学）日本画科を卒業。写生一途の創作姿勢をくずすことなく現在に至る正統派の日本画家。昭和49年神戸市あじさい賞、昭和52年兵庫県文化団体半どんの会現代芸術賞を受賞。昨年京都書院から「画集昇外義」を出版。写生を基本姿勢とする独自の線の芸術が高く評価された。

作品・人柄ともに良し 昇 外義

選考委員

赤根 和生 <美術評論家>
乾 由明 <美術評論家>
増田 洋 <兵庫県立近代美術館館長補佐>
伊藤 誠 <姫路市立美術館副館長>



アトリエで制作中の昇画伯

四人の委員から、結果的には数人の候補者の名が挙がりましたが討議の末、全員一致で日本画の昇外義氏に授賞が決まりました。

何よりも同氏の作品がすばらしい。最近、他の同種文化的なもの、結果を見ても、どうも順番持ち回り式、毒にも薬にもならない、さして不満も出ぬ代わり、全く他の作家たちの刺激にならぬ風の授賞傾向が強くなってきているようです。時には、作品はそっちのけ、社交のみで名誉を「買って」いるような情ない風潮すら見え、天下はまさに泰平……かとガイタンすべき状況でもあって、その点、本賞は実力本位が実証された、堂々たる授賞といえます。

昇氏の人柄も、委員間で推賞の対象となりました。昨今には珍しい、いささか「浮き世離れ」したような、あるいは常に六甲山へ出向いての「仙人」めいた生活への没入、そして観察、写生一筋の制作状況は、とかく安直な方向へ傾きやすい現代人に、ものすごいハッパをかけること間違いなしです。

厳格、流麗、かつ優艶とならべますと、いささかほめ過ぎですが、何よりもあのはつらつとした精神年齢の若さが、今後の飛躍かつ深化をうながすこと間違いなしと実感させます。

願わくば昇芸術の「代表作」実現の早からんことを！

△伊藤 誠△

●選考経過

文化芸術部門は毎回、美術、文学、音楽と分野別に順次選考が行われ、今回は美術部門の選考年に当たる。美術部門では河口龍夫△造形△、荒木高子△陶芸△に次ぐ3人目の受賞者の選考となった候補者に上ったのは、水墨画の藤原志保、巨匠クラスの技術を持ちつつ、地道に写生を続ける日本画の昇外義、先頃尼崎アルカイックホールの緞帳になった作品が高く評価される洋画の白髪一雄、豊岡で地元のために創作活動している日本版画協会の河原英雄、バリ在住にも拘らず毎年帰国して作品を発表し続けている松谷武判、日本画洋画の枠を越えた作風の田中竜児、二紀会の小笠原誠次らが掲げられた。

この文化賞が、芸術家達の実力を基準として与えられるものであり、かつ、まちの賞として地元に新鮮な影響を及ぼすようにとの選考委員諸氏の意向から、兵庫県下ではどちらかといえば微温的な日本画界で、本来的な画家としての姿勢をくずすことなく活動を続けている昇外義に授賞が即決した。ことに氏が写生を重んじ線画一本で描き続けていることとその技術の確かさ、大家として十分に深まる要素がある事が高く評価された。

△敬称略△

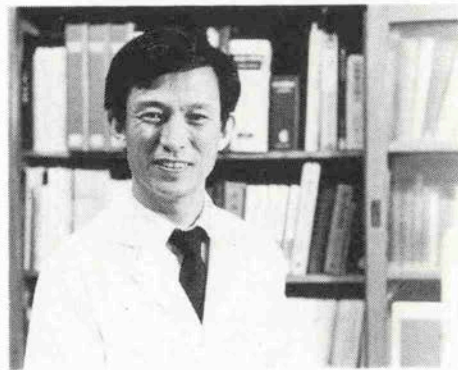
第7回井植文化賞科学技術部門

家畜育種学に新分野

辻 莊一

選 考 委 員

岩井 誠三 <神戸大学医学部長>
西羅 寛 <神戸大学農学部部長>
松本 隆一 <神戸大学工学部長>
真鍋 正志 <神戸新聞論説委員>



神戸大学の研究室で

●選考経過

西神工業団地、西区の神戸ワイン農場など、神戸を中心とした科学技術全般の活動はめざましい。昨今のニュースパリユーとして試験管ベビー、DNA（細胞融合）などが高いが、マスコミのとり上げる姿勢に問題はないか、改めて指摘された。地味ながらコツコツと研究を続けている人にも目を向ける必要があるであろう。

工学関係で、西神工業団地の話題が出たが、現在構想段階であり、いずれ具体性を帯びてからになる。医学の周辺では、予防者感染症の情報交換グループの実績を評価する声が挙がったが、もう少し結論がはっきりするまでとなった。また情報化社会に相応しいのでは、と細胞の伝達機構を研究している西塚泰美神大生化学教授も候補に上がった。

脚光を浴びている分野に、バイオテクノロジー、遺伝子工学がある。その中で、鶏を材料に、地道に研究を続けている神戸大学農学部 辻一助教授が、一同の支持を得た。細胞の酵素から導き出した基礎的テーマは、限らない応用力をもつといえる。この研究は、日本ばかりか世界の学界でも高く評価された。農学のあり方が問われる現在、氏の受賞は農学の再評価にもなり喜ばしい限りである。

神戸大学農学部助教辻一博士は、神戸大学農学部福島豊一教授の指導のもと、長年家畜育種学の研究を行ってこられた。最近、

遺伝子工学の進歩により生物の遺伝子制御機構は著しく明らかにされてきたが、発生から生涯にわたって統括する遺伝子制御機構の余りにも複雑な高等動物においては不明の部分が多い。この種研究の困難な理由の一つは好適な遺伝モデルが極めて少ないことである。氏はニワトリの腎臓中のオルニチントランスカルバミラーゼ酵素が生理的に意味のないことに着目し、その制御遺伝子に変異のあることや構造遺伝子に欠損のあることを発見し、遺伝子制御研究に欠かさないニワトリの新系統を作出し、

維持している。この研究は家畜の品種間や個体間に存在する代謝上の相違点を分子生物学的手法によって解明する研究に新知見を加えたもので、高く評価されている。

氏はさらに動物血液中の鉄運搬たんばく質であるトランスフェリンの比較生化学的な仕事を行っている。神戸ビーフの肥育素牛・但馬牛にはこのたんばく質のJという遺伝子をもつ牛があり、このJが古い時代の朝鮮半島の牛からの由来と考えると、古文書の記録と一致し、但馬牛の来歴を考える上で興味深い。この基礎的研究と、同時進行の集団遺伝学的研究は、今後の但馬牛の改良特に交配計画の立案上、有効な示唆を与えるものと期待される。〈西羅 寛〉

第7回井植文化賞社会福祉部門 難病患者・その家族を支える 米田寛子

選考委員

服部 正 <松蔭女子学院大学教授>
野上 文夫 <兵庫県社会福祉協議会
社会福祉情報センター所長>
津田 元 <神戸新聞社社会部長>



初めての遠足・東条湖で楽しむ子どもたち

●選考経過

福祉の場合は、厳密な意味での新人というのはいり得ない。新人賞とはいいいながら年齢ではなく社会的な新人というような扱いをしなければならぬということ。また前回団体を受賞しているの今回のはなるべく個人に賞をあげたい。そしてどちらかというと他の賞をもらう機会が少ない人(団体)にあげたいという意見が選考委員の間から出され次の二人に絞られた。

一人は山本博繁「脳卒中友の会」会長であり、会長自身が脳卒中を克服して再起、「闘病記・脳卒中」と闘った15カ月」を執筆し多くの患者に社会復帰・自立への勇気を与えた。また県下の脳卒中後遺症患者とその家族の福利厚生自立活動推進の力になっている。

もう一人は、米田寛子「兵庫県難病団体連絡協議会」事務局局長。難病患者の連絡組織である同協議会の事務局局長は二年前からだが、それまでの十数年間「兵庫県腎炎ネフローゼ児を守る会」で、事務局長の二男と同じような病気の子どもを持つ家族らを勇気づけてきた。

「難病」というのは医療と福祉行政の間にあってなかなか日が当たらない。そのような状況の中で十数年も活動が続けてきた米田寛子に今回の受賞が決定した。

十団体三千八百人を抱える兵庫県難病連のかねめで、所属団体の一つ腎炎・ネフローゼ児を守る会(二百人)の会長でもある。

現在、高校三年生の二男が、小学校一年の時、突然尿血を出して発病(ネフローゼ)した。病院を転々としたが、一年間の休学を余儀なくされた。わんぱく盛りだっただけに、本人や家族のショックは大きかったという。合わせて難病対策の遅れを痛感し、同守る会に入会。対行政交渉など人のいやがる場にも率先して臨み、患者と家族の実情を切々と訴えてきた。

そのひたむきな人となり、会員たちに信頼され、五十一年、会長に推された。五十五年には、同守る会の全国大会が神戸で開かれ

たが、開催県の会長として準備に奔走、運動を大きく盛り上げた。

その実績を買われ、五十五年からは上部連絡団体の県難病連の事務局長に就任。守る会での経験を生かし、各団体の連絡調整、行政交渉などに手腕を発揮し、幅広く信頼を集めている。

とりわけ県の委託事業である難病患者と家族を対象にした「医療と生活、教育相談会」は、年二回、県下各地で開かれているが、米田さんの隠れた努力によるところが大きい。スタッフの調整に会場の確保などに、自宅を事務所代わりにして電話連絡。「健康な私たちが頑張らなくては」が口ぐせの「やさしき母」である。

△津田 元▽

住民による地域づくりを実現 明延ふるさとづくりの会

選考委員

一谷定之 阪 <園田学園理事長>
今井 仙三 <丸山地区文化防犯協議会会長>
長島 晴雄 <神戸新聞社取締役>



無縁墓慰霊碑の碑文

「土のぬくもり、人のぬくもりを生かしかるか」大屋町明延地区のふるさとづくり。

昭和53年大屋町では農村部を対象とした新しい村づくりの運動が始まったが、鉱業が中心の明延地区では農家がないために新しい村づくり運動からはずれていた。これに対し「俺たちも村づくりをしないで良いのか」という機運が自主的におこり、「明延ふるさとづくりの会」が発足した。地域づくりとして、共同墓地の整備・マイカーバンク制度・一円切符セット及びふるさとへの便りは絵ハガキで出す運動・ミニコミ紙「村だより」の発行・明延風土記写真真集の編集など数多くのことがなされている。しかし今後は、生活環境づ

くりも新資源とする積極的な対応がせまられており、社会資源が活用され、工夫される余地のある間に、一歩踏み込まなくては過疎化は避けられないであろう。

大屋町役場主導の村づくりの運動の中でおこった明延地区の自主的な村づくりをみて、今日の農村社会のテーマを都市部の人達によく理解してもらいたい気持ち一杯である。もし大屋町がマスタープランづくりを進めるなら、都市部の人達にも、村の主体性を損わない範囲で参加する道を考えて頂きたい。恐らくは人の知恵を越えた面白さが出て来るはずである。今後とも住民主体の原則を貫き、関係者の努力が実を結ぶことを心より期待する。

(今井仙三)

●選考経過

「地域活動は、本来的には国の施策にひっぱられてその町なり都市の代表者が何かを行なうのではなく、各地域の中で、民間主導によって長年の間、活動をつづけていることが必要である」というのが選考委員の総括的な意見で、特にユニークな活動を続けている候補者が上げられた。

ここ数年、常に候補に上げられていた「鉱山のまちにふるさとづくりの輪」をテーマに活動が続いている大屋町明延地区の名が真っ先に上げられた。

がらくた市や郷土文化を伝える出版活動などに積極的に取り組んでいる「明石コミュニティセンター」、地道に神戸の歴史の発掘をつづけている「神戸史学会」、また少し見方を変えて、将棋の谷川浩司名人を幼い頃から育てあげた若松政和五段の尽力もある種の地域活動といえるのではないかと意見も出た。

結局、第7回は、「明延地区・明延ふるさとづくりの会」に全員一致で決定した。

その受賞理由は、明延地区に農村部を対象として始った新しい村づくりが民間の手によって地道につづけられ、それが定着したことが高く評価されていることである。

第7回井植文化賞報道出版部門

ユニークな企画を高く評価

神戸新聞淡路総局「淡路祭事記」

選考委員

松井 政和 <ラジオ関西西播磨専任取締役>
左藤 孜 <NHK神戸放送局長>
長島 晴雄 <神戸新聞社取締役>



7冊に及んだ「淡路祭事記」のスクラップブック

長期連載企画「淡路祭事記」は

昭和57年4月1日から、58年3月31日まで1年間、365日にわたって神戸新聞淡路版に連載されたものである。

お祭りという民俗行事を、これほど全地域のすみずみまでこまかく徹底調査し、記録した例は、恐らくほかにあるまい。1年間毎日取り上げ、途切れることがなかったというのも驚きである。

その内容は、単に寺社の祭礼の記録にとどまらない。誕生、生育、結婚、厄、葬送、両墓制など、人生のあらゆる通過儀礼が組み込まれているし、農業、漁業、酪農などの年間を通しての祭事を克明に追っており、まさに淡路の民俗のすべてがここに集約されている

といえよう。

淡路はいま大変革の前夜にある。大鳴戸橋の開通を間近にひかえ二年後には縦貫道も開通する。そうなれば地域環境も人々の暮らしも大きく変わるに違いない。その結果、祖先の「こころ」を伝える祭礼や年中行事、民俗芸能の中のかんりのものが、消滅するのではあるまいか。

そうだとすれば、いまの間にできる限り収録しておこうというので、神戸新聞淡路総局が取り組んだもの。80年代の淡路の一断面を知る貴重な記録として価値ある仕事だと思ふ。

なおこれを一冊の本にまとめ、神戸新聞出版センターから出版された。

〈長島晴雄〉

●選考経過

候補として、神戸新聞出版センター「のじぎく文庫」が今年も話題となった。戦後の厳しい時代から長期にわたる出版活動と貴重な記録保存の面からも意義深いものとして有力な候補に上げられたが、昨年の1年間特にめざましい活動が見られないなどの理由から、今回は見送りとなった。

また、陳舜臣氏の個人全集「中国の歴史15巻」足立巻一氏の「竹中郁全集」などが上ったが文化賞の主旨から考慮した場合、多少性格を異にする点で対象外となった。

神戸新聞文化センター「但馬の文化財」は現在刊行中であり、全巻完結後の業績に期待したい。特に報道面からラジオ関西の神戸市・天津市友好都市提携による日中友好番組「神戸からこんにちわ」「天津からこんにちわ」は、現在3年目を迎え、国際親善を含めたユニークな企画として今後の結実が大いに期待される。

神戸新聞淡路版に連載された「淡路祭事記」は、年間を通じて淡路の各地で毎日欠かさず祭りが行なわれている事実を克明に取材した貴重な記録であり、その企画の独自性と淡路総局取材班のきめ細かい取材内容が高く評価され、全員一致で受賞が決定した。